

第44回身心変容技法&ワザ学・こころ観合同研究会

京都大学こころの未来研究センター

発表レジュメ

題目：「共鳴～隻手の声：認識における共鳴の役割、観想的経験からのアプローチ」

Resonance: The Sound of One Hand Clapping

The Role of Resonance in the Cognitive Process of Contemplative Experience.

発表者：忠岡経子（英国プリマス大学トランステクノロジー・リサーチ博士課程在学）

1. OUTLINE 自己紹介&研究主題の紹介
2. 私の経験「ジェイン・グドール講演会での出来事」&イメージ
3. 問題提起 Contemplative Studies の現状
4. ポイント1 哲学的介入 ヘルグソンの経験論
5. 今後の課題 ポイント2 振動的プラクティスとしての観想的手法
6. 今後の課題 ポイント3 情動的認識としての共鳴
7. Bibliography 参考文献
8. Appendix 付録

1. OUTLINE, 自己紹介&研究主題の紹介

- ・ 研究所トランステクノロジー・リサーチの目的：テクノロジー編み出され、それが公に共有されるその前後における、意味づけの変化と、その背後にある創造的働きの重要性を解明すること。科学技術の発展において、人間の欲望や文化的責務が投影されてきたように、その背後にある創造的働きの歴史的、哲学的、文化的など多面から照らし解明していく。
- ・ 研究範囲：映像学、メディア学、メディア・アーキオロジー、文化人類学、科学、医学、ホリスティック・サイエンス etc.
- ・ 研究法：トランスディシプリナリー Transdisciplinary (Montuori, Niculescu)

- ・ 私の研究主題：「観想的経験&その手法（技・技術）」、その背後にある創造的働きの一つ「共鳴」を、経験則（heuristic）に基づいて探求する。
- ・ 観想とは：「哲学的営み」のプロセス、その行為。観想的行動、経験、またそれに伴う手法が、思想を育むという創造行為であり、その認識過程において深い個人的思想、または気づきをもたらす。
- ・ 共鳴とは：その哲学的営み、思想が織り込まれる際の認識過程における、主観/客観、内界/外界の交差点にある「知覚的器官」。

2. 私の経験「ジェイン・グドール講演会での出来事」&イメージ



2011年5月2日、ジェイン・グドール講演会 Tagore Festival, Dartington Trust.

「体のすべての細胞が目を持っており、その場に全身全霊で在り、全細胞が開いている感覚。ジェインが発している言葉は、何気ない普通の言葉なのだが、発せられる言葉が全身に振動して、浸透していく感じ。」

この経験と似たような感覚を覚えたイメージ4枚を紹介。



image 1 "Preening Owl" by カノージュアック アシュエヴァク Kenojuak Ashevak

image 2 "Enchanted Owl" by カノージュアック アシュエヴァク Kenojuak Ashevak

image 3 沖縄の海

image 4 パドマサンバヴァ：チベット密教の開祖

この身体が開いた感覚こそが、この研究の問題提起の範囲であるContemplative Studiesの哲学的基盤、すなわち、主観/客観、内界/外界が交差する「根源的循環性（ヴァレラet al）」においての体験的感覚としてヒントを与えてくれるのではないのだろうか。

3. 問題提起 Contemplative Studies の現状

・ コンテンプラティブ・スタディーズとは。

—科学的アプローチの優待

認知科学を中心とした科学的アプローチが主流。瞑想法の「instrumental efficacy—技術的有効性（Andresen 2000）」を科学的、医学的に実証するべく、科学技術の発展とともに、実証を積み重ね、そこで立証された科学的データ、科学的根拠などが、瞑想法が公的な場で使用される際の理論的基盤となっている。

—宗教学からの批判の声

①ハロルド・ロス Harold Roth（米国ブラウン大学）・道教専門家

Contemplative Studies に寄与している宗教学、人類学そして認知科学の背景に流れる「認識論を批判→「unreflective ethnocentrism（軽率な自民族中心主義）」、「cognitive imperialism（認識的帝国主義）」。ヨーロッパ中心的で、アブラハム宗教中心のと批判。

②他の宗教学者(Sherman 他)

「Inverted orientalism（逆オリエンタリズム）」

「東洋の精神・西洋の科学」というモデルへの過信的強調が他の宗教への排他的姿勢である。

③ルイーズ・コムジャーシー Louise Komjathy（サンディエゴ大学）道教専門家

多宗教の専門的な観点から contemplation がどのようにその多宗教の文脈の中で理解され位置づけられているのかを近接して並べながら、コンテクスト理論を基底とした「praxis with psychology of realization 認識の心理学としての実践法」のアプローチを宗教学の視点から提案。科学的手法優待に見られる非宗教的、科学技術的アプローチへの批判だけでなく、ペレニアル哲学などの宗教的多様性へのハイブリッド手法への批判も踏まえ、瞑想や他の観想的手法が、その歴史的、政治的、経済的、そして心理的背景のコンテクストを除外して理解、実践されるべきではないと主張。その例として、曹洞宗の只管打坐（しかんたぎ）という座禅法が、開祖である道元が患っていたといわれる鬱病への対処メカニズムかもしれないという示唆や、近年得に欧米で見られる瞑想法や他の観想的手法のビジネスの拡大、そこに潜む

spiritual colonists (スピリチャル帝国主義者)、 monoculturalism (単一文化主義)、またここらの問題から逃避する新たな anesthetization (麻酔)、また pacification (和平工作)としての批判が掲げられると強調。道徳・政治的な問題でもある、瞑想法の軍事的応用にも触れ、観想的手法が含む世界観や価値観が無視され、手法だけが一人歩きをしている状態に宗教学的な視点から警鐘をならしている。

- ・ 背景/哲学的基盤：「根源的循環性 (fundamental circularity)」(ヴァレラ et al 1991)
- ・ 問題提起：1991年に発表されたヴァレラ et al の「身体化された心」(ヴァレラ et al 工作舎出版、田中靖夫訳) は、今まで主観/客観、内界/外界、つまり「根源的循環性」のバランスが両方とも後者に偏っていた科学的手法に、マインドフルネス瞑想を用いて「根源的循環性」のバランスをとるという画期的な試みであり、認知科学へ的手法的、哲学的介入を行った。これが現在の Contemplative Studies の哲学的基盤ともなっている。学際に参加している研究者たちは、各研究範囲の中で潤滑な「根源的循環性」を試みてはいるが、研究主題である「観想的経験」また、それに伴う手法を扱う上で、学際が実践している学術法は、その背後にある創造的働きを一色に塗ってしまうものであり、決して一緒ではない個々の経験がもつ特質、そして傍観者の感性を統一化する方法となってしまう。この Contemplative Studies の現状に対して、オルタナティヴを提唱すべく、次の3点を中心に展開していきたい。
 - ① 哲学的介入→ベルグソンの経験論、
 - ② 手法的介入→「振動的プラクティス」、
 - ③ 創造的働き→「情動的認識 affective cognition」→「共鳴」

4. ポイント1 哲学的介入 ベルグソンの経験論

- ・ 「純粹持続」、と空間化された時間の比較。
- ・ 量的多様性&質的多様性
- ・ 「意識の状態」から「行動の状態」への視点のシフト。
- ・ ここらの聴診：「本当の経験論は、原文そのものにできるだけ迫ってその生命を深くさぐり、一種の精神的聴診によってその魂が鼓動しているのを感じようとする志すものであって、この本当の経験論が真の哲学である。」(「思想と動くもの」岩波文庫 ベルグソン著 河野与一訳 p272) "[A] true empiricism is that which proposes to get as near to the original itself as possible, to search deeply into its life, and so, by a kind of intellectual auscultation, to feel the throbbings of its soul; and this true empiricism is the true metaphysics."

(Bergson 1912, p36-37.)

5. 今後の課題 ポイント2 観想的手法→「振動的プラクティス」

- ・ 振動としての「根源的循環性」
- ・ 「振動的現代主義 Vibratory Modernism」(Enns&Trower 2013)

「根源的循環性」を振動 vibration として捉え、観想的手法を技術的手法としてアプローチするのではなく、振動的手法として見直してみる。

6. 今後の課題 ポイント3 創造的働き→情動的認識 Affective cognition→「共鳴」

- ・ 情動理論 theory of affect (Jameson)
- ・ 「情動とは、世界を知覚する器官そのものである。」"Affect, organ of perception of the world itself." (Jameson 2015, p43)

観想的経験の背後にある創造的働きを、ジェイムソンの情動理論を用いて考察し、情動的認識のひとつとして「共鳴」を提案する。その働きと観想的経験、そしてその手法の関連性から探求する。例 チャンティング、その構造との関連性。

7. 先行研究の例

- ・ ナポリン (2013、近刊) 【文学、サウンド・スタディーズ】

イギリスの小説家ジョセフ・コンラッドの作品中、特にキャラクター、マーロウを"spiritual lingua franca—精神的共通語"として確立させたコンラッドの文学スタイルに着目。「振動」、「音/声」、「イメージ」の交差点の中から「共鳴」を解く試み。

Napolin, J.B. (2013) "A Sinister Resonance": Vibration, Sound, and the Birth of Conrad's Marlow. *Qui Parle: Critical Humanities and Social Sciences*, 21:2, Spring/Summer, 69-100.

Napolin, J.B. (forthcoming) *The Fact of Resonance: Acoustics, Double Consciousness, and the Limits of Modernism*.

- ・ アイドシャイム (2011、2015) 【音楽学、ヴォイス・スタディーズ】

文化的、政治的な要素に影響される「声質」から、個々のもつ特質を表現する「声質」への転換、その方法の探求。ケーススタディーズとして、エキストリーム・オペラを実践するオペラ

歌手Snapperの例（水中での歌唱法を編み出し、極限的な環境の中で編み出された「声質」、そしてその実践法として確立）を紹介。

Eidsheim, N.S. (2015) *Sensing Sound: Singing & Listening as Vibrational Practice*, Duke University Press, London.

_____, (2011) Sensing Voice, *The Senses and Society*, 6:2, 133-155.

_____, (2014) The Micropolitics of Listening to Vocal Timbre, *Postmodern culture*, 24:3.

8. Bibliography 参考文献

Andresen, J. (2000) Meditation Meets Behavioural Medicine: The Story of Experimental Research on Meditation, *Journal of Consciousness Studies*, 7, No.11-12, 17-73.

Bergson, H., Hulme, T.E. (trans.) (1999[1912]) *An Introduction to Metaphysics*, Hackett Publishing Company, Indiana, U.S.A..

_____, Pogson, F.L.(trans) (2001 [1913]) *Time and Free Will: An Essay on The Immediate Data of Consciousness*, Dover Publications, New York, U.S.A..

Contemplative Studies Consultation Proposal, [Online]

https://www.sandiego.edu/cas/documents/contemplativestudies/csc_proposal.pdf
(Accessed: 4 January 2016)

Eidsheim, N.S. (2015) *Sensing Sound: Singing & Listening as Vibrational Practice*, Duke University Press, London.

_____, (2011) Sensing Voice, *The Senses and Society*, 6:2, 133-155.

_____, (2014) The Micropolitics of Listening to Vocal Timbre, *Postmodern culture*, 24:3.

Enns, A. & Trower, S. (eds.) (2013) *Vibratory Modernism*, Palgrave Macmillan, London.

Jameson, F. (2015) *The Antinomies of Realism*, Verso, London & New York.

Komjathy, L.(ed.) (2015) *Contemplative Literature: A Comparative Sourcebook on Meditation and Contemplative Prayer*, State University of New York Press, NY., U.S.A..

Napolin, J.B. (2013) "A Sinister Resonance": Vibration, Sound, and the Birth of Conrad's Marlow. *Qui Parle: Critical Humanities and Social Sciences*, 21:2, Spring/Summer, 69-100.

Roth, H.D. (2008) Against Cognitive Imperialism: A Call for Non-Ethnocentric Approach to Cognitive Science and Religious Studies. *Religion East & West*, 8, 1-26.

Sherman, J.H. (2014) On the Emerging Field of Contemplative Studies and Its Relationship to the Study of Spirituality. *Spiritus: A Journal of Christian Spirituality*, 14:2, Fall, 208-229.

Varela, F.J., Thompson, E. & Rosch, E. (1991) *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience*. MIT Press, MA, U.S.A..

Wallace, B.A. (2008) A Response to "Against Cognitive Imperialism" *Religion East & West*, 8, 27-31.

9. Appendix 付録

RESONANCE: The Sound of One Hand Clapping

The role of resonance in the cognitive process of contemplative experience.

The aim of this research is to contribute to the understanding of contemplation as a conduit to profound personal philosophical insight through focusing on the cognitive process of aurality. The metaphor of Hakuin's Buddhist dialectic riddle, "the sound of one hand clapping," is used as an attempt to illustrate the existing dichotomies of "two hands" — subjectivity/objectivity, which reflects the diffraction of favored gravitation in its applied methodology within Contemplative Studies. Rather than staying in this dichotomy, I would like to bring Bergsonian notion of duration and resituate the experience as an enriched integrated qualitative mode of duration by distinguishing contemplative practices as a state of action rather than a state of consciousness. Drawing insights from Media archeology, literacy, as well as sound studies, concept such as mediation and affect are used to argue how focusing on its oscillating vibratory movement, particularly through sound and its cognitive process of aurality, has the possibility to reveal its affect—resonance, which can transcend the dichotomy of subjectivity/objectivity. In regarding meditation as action, I will forge a pathway in the relationship between the ontology of sound and contemplative experience, such as chanting, and suggest that the cognitive process of aurality plays an important role in its affective cognition — resonance, in the experience of contemplation.